

梅之木通信

【縄文住居をつくる会】

第34号 2022.09.12 発行

縄文のくらしを感じる縄文土器づくり

夏休み休暇も終わり9月2日からまた縄文人のくらしが始まりました。建設中の5号棟も屋根の部分や、玄関窓部分などの細かな仕様を検討しつつ（佐野さんチェックで手戻りが発生しないよう）作業が進み始めました。

まずは、夏の間にも生い茂った雑草とりから。今年の夏は雨が多かったせいか皆さんも庭や畑の草刈りで忙しかったことと思います。5号棟も土間の部分まで生えていた雑草を抜き、作業場にしていた場所も雑草が邪魔にならないように、また作業中に置いた道具類が雑草に隠れて無くなるように、と作業が出来る環境づくり。一汗かいた後、木陰での休憩で吹き抜けていく風が気持ちの良い季節になってきました。今年の後半戦も怪我なく5号棟の完成まで作業を進めていきたいと思います。

❖ また新たな戦力？

二学期の作業から新たな戦力？が加わりました。戦力と言えるかどうかは多少議論の余地があるかも知れませんが、慶応大学の学生や盛岡大学の学生がアートルさん（慶応大学の准教授）の指導の下、縄文住居建設体験に参加しました。梅之木遺跡だけではなく、長野県や近隣の縄文遺跡での発掘作業にも参加してきたようですが、残念ながら継続的な戦力とは期待できないようです。

世話好きなおじさんたちは、自分たちの経験を若い人たちに教えるので、作業の方は停滞義気。熊さんも学生たちに樹木の伐採を体験してもらったり、皮むき体験してもらったりといった指導もあって少しペースダウン気味ですが、9月はまだまだ準備運動中といったところでしょうか。

アートルさんは経済学部の准教授ですが、専門は文化人類学。文化人類学と経済学との繋がりが我々には良く理解できません。我々にも分かるような授業もお願いしてみたいと思います。



❖ 縄文土器製作

縄文人の生活体験として9月10日、縄文土器製作にチャレンジしました。

講師は、白井沢在住の陶芸家でもある林さん。以前にも梅之木で土器の野焼きをされていたので、どのように焼きあがっていくかは興味深く見ていましたが、粘土から土器を形作っていくところはほとんどの人にとって初めての体験。17名と多くの参加希望があったので、1号棟と4号棟に分かれての作業となりました。いつものうるさい人たちは佐野さんに纏めて面倒と見ていただき1号棟へ、子供たちや陶芸初心者の人たちは林さんの指導で4号棟へ。地元の土を使った粘土で作成すれば出土される縄文土器に近い雰囲気のものにでき上がるようですが、今回は素人でも失敗が無いように一般の陶芸用粘土に野焼きの為に砂を混ぜたものを使用しました。



林さんの説明を聞きながら土器づくり作業開始



いつもは賑やかな人たちが黙々と・・・普段の作業と違った不思議な雰囲気



少年達の顔も真剣でした



大人と違った発想でどんな土器ができるか楽しみです

今日はじいじと



ネコの餌箱? などなど、個性豊かな作品ができあがりました



- ❖ 24日(土)は作成した土器の野焼きを予定しています。午前中だけでは焼きあがらないので、当日は昼食にカレーをみんなで準備しながら、作成した土器が焼き上がるのを待ちたいと思います。土器づくりに参加できなかった方も野焼きの見学に来てみたらいかがでしょうか。